

ギメ国立東洋美術館

宇野茂樹

(一)

私はインドから中国・朝鮮半島を経て日本に伝流する仏教美術、とくに仏像彫刻を永年にわたって探訪してきた。ガンダーラ・マトウラーを源流として展開する仏像彫刻は、カラコルム山脈を越えて崑崙山脈の北麓、あるいはアフガニスタンに流れて、パミール高原を経て天山山脈南麓のオアシス都市に数々の石窟寺院を残して行く。しかし残念にもアフガニスタンは、長びく内紛のため訪れる機会を逸してしまつた。一九九二年三月パキスタン当局の特別許可を受けて、ペシャールとアフガニスタンを結ぶ重要な国境の峠であるカイバル峠を訪れて、眼下のアフガニスタンを望んだのが、せめてもの私の願望を癒す

縁であつた。二〇〇一年三月イスラム原理主義勢力タリバーンによつてパーミヤンの東西大仏が破壊され、アフガニスタンの仏教遺跡の大半を収蔵していたカプールの国立博物館の所蔵品も、紛争のため破壊や略奪にあつて一部を残して多くが散逸してしまつた。

二〇〇二年七月より九月にわたつて、東京芸術大学美術館では「アフガニスタン悠久の歴史展」が催され、ベグラーム・ハツダ・パーミヤン石窟などの遺品の数々が公開され、さらに同年十月には、中淳志氏のパーミヤン東西大仏破壊後の撮影である労作写真集が東方出版より出版された。東京芸大大学美術館の「アフガニスタン悠久の歴史展」には、ベグラーム出土品やハツダ出土の仏・菩薩の頭部がギメ国立東洋美術館から多く出品されている。フランスは一九二二年から向こう三十年間、アフガニスタン国内の遺跡の考古学的調査を独占する

権利をアフガン政府から獲得し、貴金属および唯一無二の出土品でない限り、発掘品の半分をフランスに持ち帰る確約を得た。その発掘品を収蔵するのがギメ国立東洋美術館である。フランス調査隊の独占した三十年が過ぎて一九五二年始めてアフガニスタンの遺跡はフランス以外の国の調査隊にも解放された。早速イタリアの調査隊が入り、日本からも京都大学調査隊が一九五九年から調査をはじめた。その後、アメリカ・ドイツ・ソ連・イギリス・インドの各調査団も入っているが、アフガニスタンの発掘で、出土品が国外に持ち出されたのは、文化協定で認められたフランスだけである。カプール国立博物館収蔵品の大半が略奪されて流出し、あるいは破壊された今、ギメ国立東洋美術館の所蔵品は貴重な存在で、アフガニスタン探訪の諦めと東京芸大のアフガニスタンの催しに刺激された私は、二〇〇二年十一月下旬ギメ国立東洋美術館を訪れることになった。

(一)

ギメ国立東洋美術館は十九世紀のフランス・リヨン出身の実業家エミール・ギメが、収集した東洋のコレクションを核とする、ヨーロッパを代表する東洋美術館である。ギメはフランスの依頼で諸外国の宗教調査を目的とした旅に出て、アフガニスタンを始めとしてインド・パキスタン・カンボジア・ヴェトナム・ビルマ・インドネシア・中国・朝鮮・日本などを歴訪してその宗教美術を持ち帰った。ギメが日

本に立ち寄ったのは明治九年（一八七六）の約五ヶ月の間であった。帰国したギメはリヨンに宗教美術館を創設したが、のち彼のコレクションは国に寄贈されてパリで公開されることになる。



ギメ国立東洋美術館

現ギメ国立東洋美術館は、一階は東南アジア美術（クメール、チャンバ、インドネシア、ビルマ、チベット）、二階は西アジア美術（アフガニスタン、インド、パキスタン）、三階は東アジア美術（中国、朝鮮、日本）、地階は企画展示室となっている。

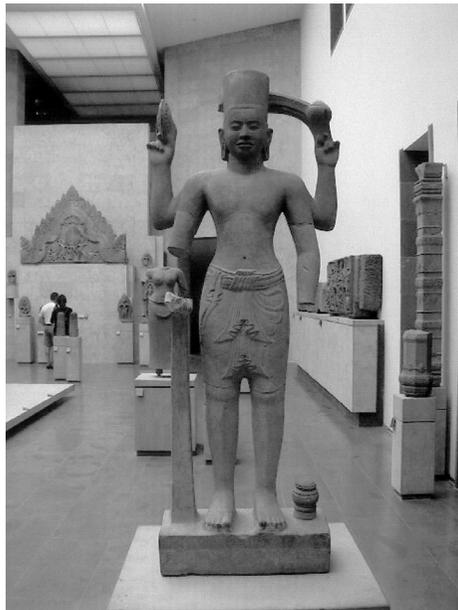
一階東南アジア美術

一階展示の中心をなすものはクメール美術である。館を入ると真正面に神蛇（ナーガ）の胴を掴んで綱引きをするデーヴァの神が入覽者を迎え、その背後に数多くのクメール美術が公開されている。

クメール族の歴史は紀元前後ごろまで遡りうるが、クメール美術が新しい発展の時代を迎えるのは九世紀に入ってからである。アンコール（都城の意）が創建されたのは、その後まもなくのことで、アンコールはカンボジア国の西部、トンレサップ湖の北に位置し、アンコール・トムはその代表的なもので、著名なアンコール・ワットはその南にある。この地方が政治・文化の中心になるのはジャヤヴァルマン二世のときからで、王はクメール族を統一して、繁栄期を迎えるこの国の基礎を築いた。以後、王都の内外には大小多数の寺院が建立され、一般に九世紀から十三世紀ごろまでをアンコール時代と呼び、それはクメール族の旺盛な造形的エネルギーと、熱烈な宗教信仰・強力な専制王権との結実が主導をなして生み出したクメール美術時代であった。クメールの勢力は十世紀ごろよりラオスやタイにも伸びて、ラオスのワット・プー、またタイと国境を接するカンボジアのカオ・ブレア・ビヘル遺跡、さらにタイのウボンラーチャタニやナコンラーチャシマ、ロップブリーなどにもクメール美術の遺跡が所在している。

いまこれらの遺跡は保護されて、クメール美術の真髄をよく伝えてはいるが、それはいづれもクメール建築とその装飾が主となつてい

彫や、祠堂・門などの正面、楣（まぐさ）、破風、柱などの裝飾的浮彫文様や意匠からクメール彫刻の美を知ることができるが、神像や護法像の独尊像はほとんど伝えていない。それがギメ国立東洋美術館ではシバ神など独尊の優れたものが収蔵されている。



シバ神

例えば等身大のシバ神像やヴィシュヌ神像、また孔雀明王のもとになるマカマリ像、馬頭の神像など十一世紀から十二世紀にわたる神像が公開されている。ヴィシュヌ神と考えられるうちの一つである八臂像の上半身には、小さな無数の神々が一面に彫りだされ、それは時代は異なるが中国雲岡石窟第十八洞の仏像体軀の化仏を思わせ、亦この

像の顔の表現は、クメール独特の微笑を含んだ魅力あるもので、クメール族の造形美術の創造性を如何なく描出している。建築装飾の一部も多く収蔵されていて、祠堂や門などの正面、楣、破風の精緻な彫刻を見ることが出来る。クメールの建築は、ところ狭しとばかりに装飾的浮彫文様や装飾意匠を施すのが特色で、公開されているものの中にインドの二大叙事詩「マハーバータ」や「ラーマーヤナ」から取材した挿話を浮彫したものもあり、いづれもクメール建築装飾の躍動し、正気にみちた力強い表現を垣間見ることが出来る。

二階西アジア美術

二階にはアフガニスタン、インド、パキスタンの仏教美術と一部にヒンドウ教の美術が公開される。二階に公開される三国は、いづれも亜インド大陸の国々で、初期仏教美術の展開に大きな役割りを担う重要な地域である。

インドに仏像が現われてくるのは西紀後一世紀終りごろと考えられている。その発祥地はパキスタンのガンダーラ地方と、インドのマトウラー地方で、最初、仏伝に釈迦像が見られるようになり、釈迦の独尊像がみられるようになるのはその二世紀に入ってからである。ガンダーラ地方の仏陀は大衣で両肩をおおい、小さな頭光と肉髻、口ひげをつけ、その服装はインド風ではあるが、衣文や大衣の処理などはギリシア系の表現手法に倣っている。これに反してマトウラー地方の仏陀は、右肩をぬいだ偏袒右肩と両肩を大衣で包んだ通肩の二種が

あり、それぞれ立像と坐像がある。偏袒右肩は立像、坐像とも年代の早いものに多く、通肩タイプは比較のおそく現れる。像容は特異な巻貝形（カバルダ型）肉髻を頭上に結び、丸顔で、大衣は肉体が透きとおるように薄く彫出して、すこぶるインド風である。仏像の出現について早くからガンダーラ起源説が唱えられていたが、二〇世紀前半中ごろにマトウラー起源説が出てきて、両者の先後を論じることは現段階では困難とされる。



ガンダーラ 釈迦菩薩立像

いま館にはガンダーラの彫像としては、釈迦菩薩像などが公開されている。釈迦菩薩像は等身大の完形立像で、頭光を配し、貴人風のい

ろいろの蔽身具をつけた菩薩（太子）としての釈尊像で、台座には供養者が浮彫される。普通ガンダーラ彫刻は一部が破損しているものが多いのにかかわらず、この像は完存するだけに貴重な二世紀末の彫像といえる。マトウラー彫刻も、頭光の上半分と肉髻、両手先が欠失する釈迦坐像などが公開される。



マトウラー 釈迦坐像

釈迦坐像はシクリ産の白の斑点が点在する赤色砂岩で作られ、身体は透けて見える薄い大衣を偏袒右肩にまとい、顔は丸顔で、マトウラー

仏の特徴を具備し、欠損した頭光の頭上には恐らく飛天が配されていたと考えられる。また近くには五世紀ごろの美しいグプター彫刻が公開されるが、残念なことに頭部を失っている。このほか南インドで前一世紀から数世紀間栄えたアンドラ王朝のアマラーヴァティ大塔の石板浮彫の一部や、オリッサ州ラリッタギリ遺跡のグプタ後期の仏像もあり、それに加えてヒンドウ教の各年代にわたる神々の彫像が陳列されて興味をそえられる。

今回ギメ東洋美術館を訪れた目的のアフガニスタンの収蔵品は、バミヤンD洞の壁面断片、カクラクの壁画、フォンドウキスタンの仏陀像、菩薩像や龍王像、ハツダの仏陀や奉獻者の多数の頭部、ストウパー基壇、ベグラム出土のガラス器、象牙細工、青銅製品、スルフ・コタルの基壇付け柱、カピサ周辺出土の仏陀像などが主なものである。しかし常設に展示されているものは、ベグラム出土品とハツダ出土品が中心をなしている。

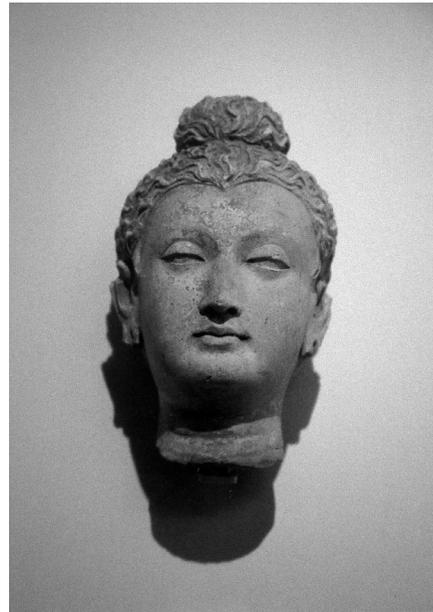
ベグラムはアフガニスタンの中央を東西に横たわるヒンドウクシユ山脈の南麓、いまのチャリカルの町の近くにあつて、クシャン王朝の最強の君主カニシユカ王のカピシ城のあったところである。クシャン族はアフガニスタンに興った民族で、前一世紀ごろ勢力を得て、バクトリア地方からアフガン東部、ガンダーラ、カシユミール、インドの西北部を領有する大帝國をつくつた。最盛期がカニシユカ王朝時代で、王の在位年代については異説が多いが、大体二世紀中ごろと言われている。王は仏教を篤く信奉し、その布教につとめ、領内に仏教がひる

く伝播した。パキスタンのガンダーラ派、インドのマトゥラー派といった独立した美術様式が確立したのも王の時代であった。クシヤン王朝は、三世紀ベルシャ・サーサーンの侵攻を受け、五世紀にはエフタル族に征服されるなどして、次第に弱小化するが、クシヤン文化の伝統は七、八世紀ごろまでアフガニスタンに存続した。八世紀末になるとアフガニスタンにイスラム化が始まり、九世紀には仏教寺院の終焉を迎えたのである。

美術館に陳列されるアレクサンドリアの絵付けガラスや切り子ガラスやグレコ・ローマン様式の青銅器、漢代の中国の漆器、インド・マトゥラー将来と考えられる象牙細工（象牙細工は文献には見えないが、この頃の遺品はインドに遺存しない）は、いづれもベグラムのカニシユカ王カピシ城王宮内から大量出土した一部で、ベグラムは東西文化の十字路の様相を示していたことが察せられる。ベグラムからは仏像は出土していないが、付近のシヨットラック、パイタヴァ、ハム・ザルガルといった寺院跡からは、ガンダーラ風の石彫やストウツコ像が出土している。これはクシヤン時代のものであるが、カニシユカ王の時代まで遡りうるかは分からないとされている。

ハッタの出土品は数多くが公開されている。ストウパーや仏陀や奉獻者の頭部で、おもにストウツコ像と片岩または石灰岩の浮彫で、これらは三丁四世紀のものと考えられている。ストウツコは多彩な装飾品と仏陀、菩薩、供養者、比丘、戦士、魔衆など多様な人物像で、ハッタの造形美術こそ、ギリシヤの美をこれほど見事に理解したものは、

中央アジアのうち、どこにも見当たらないとされている。



ハッタ出土 仏頭

ハッタはアフガニスタン東部のナンガルハール州の都であった、ジエラーバードの南十二キロに位置する。ギリシヤのヘレニズム美術からの影響がガンダーラより顕著と見られる、一五、〇〇〇体のストウツコや粘土像がみつかった仏教遺跡である。玄装は『大唐西域記』にこの町、住人、僧院のことにふれている。ハッタやガンダーラの彫像にヘレニズム様相が流入したのは、アレクサンドロス大王のインド遠征に淵源する。大王が亡くなると麾下の將軍たちは帝国を分割統治することにあり、アフガニスタン周辺地域は急速に独立に向って行く。ヒンドウクシュ山脈の北に広がるバクトリアは、西紀前三世紀中ごろ

には独立王国となった。このころインド最初の帝国であったマウリヤ王朝（前三二二〜前一八四）は西へ伸張していたが、衰退するとバクトリア王国はインドウクシュ山脈の南に勢力をのぼし、インド辺境に古代インド・ギリシア系の幾つかの王国が成立した。これらの王国は前二世紀中ごろに始まった遊牧民族の侵略によってバクトリア王国が滅ぼされた後も、約一世紀の間、存続し、ガンダーラ地方へ勢力を伸ばした。前二世紀の初め、バクトリア王朝の時代デーメートリオス王は、ガンダーラに進出してアフガニスタンの本国から独立して、パキスタンのタキシラを都とするインド・ギリシア王国をつくっている。タキシラのカツチャ・コットの土塁はギリシヤ人が都市をつくった城壁である。これらの王国も前一世紀中ごろ西方からサカ族、パルティア族の侵略に屈して消滅した。ほぼ同じ時代、史上初の遊牧民の大帝国クシャーン王朝が帝国を建てたのである。クシャーン王朝は西方の文化を取り入れた文化を樹立した。ガンダーラ美術、ハツダ美術はクシャーン文化の精華である。美術館に公開される「焰肩仏立像」（片岩、三〜四世紀）の両肩より焰の燃え上がるさまは、クシャーン朝のコインに刻出されるカニシユカ王の肩にも焰肩表現が見られる。これは『大唐西域記』の文中に、カニシユカ王が仏に加護あらんことを祈請したところ、王の肩より焰がたち起り、たちまちに悪龍を調伏させたところから、クシャーン族のもつ説話的なものが、仏陀の偉大さに習合して成立した仏陀像であろう。



焰肩仏立像

三階東アジア美術

三階には中国、朝鮮、日本の美術品が公開されている。中国美術は陶磁器関係が主となっているが、新疆地方の石窟関係品も公開されている。塑像ではキジル石窟であるとかシクシン石窟の仏頭、またキジル石窟やベゼクリックの壁画の断片もある。新疆のオアシス都市に点在する数々の石窟は二〇世紀初頭よりスウェーデン、ドイツ、イギリス、ロシア、日本、フランスの調査隊が、未知の国に埋もれた仏教美術を探訪して、世上の驚嘆を喚起した。美術館に収蔵されるこれらの遺品は、フランス隊のペリオによって将来されたものである。一九九三年夏シクシン石窟を訪れたとき、ドイツのル・コックがシクシン

石窟の星宿洞の塑造観音像は、アフガニスタンのハツダ出土の花神像に似て、ヘレニズムのな華麗な像であると言っているのを注目していた。その塑造観音像をギメ東洋美術館で目の当たりに見ることができたことは一入深い感激にうたれた。ベゼクリツクの壁画はニュー・デリーの博物館のものや、ベルリンのル・コックが持ち帰った誓願図のように大きなものでなく、小さな断片であるが、採色の保存はきわめて良好なものである。キジルの壁画の断片は爪先で立つ足の部分で、ル・コックがベルリンにもち去った「剣士の群像」の足先とよく似ている。

中国中原の彫像としては雲岡二六洞の如来立像、北魏正始元年（五〇四）銘仏三尊像、東魏武定二年（五四〇）銘仏三尊像、北周の仏五尊像や北斉期と考えられる頭部のない如来立像が公開される。五世紀末年から六世紀にわたる中国古彫刻、しかも在銘像が収蔵されることは意味深い。また唐俑の数々も公開され、その中には優れた作品も多い。

朝鮮半島の美術はあまり多くない。しかし朝鮮三国時代の小金銅仏が数躯公開されている。いづれも七世紀初頭の彫像で、うち一躯は三面頭飾を冠して榻座に坐した半跏思惟像で、朝鮮三国期の典型的な像容を呈している。

日本美術の部屋は広くはないが二室にわたっている。一室は仏教美術で、他の一室は近世絵画などである。仏教美術は彫刻と仏画で、彫刻は乾漆の頭部や九世紀から十世紀にわたる木彫像で、いづれ

も完存像ではない。頭部の頭部は脱活乾漆像で、厚手に乾漆を塑形した写実的要素の横溢した天平期の秀作で、恐らく奈良の古刹に所在した像であろう。木彫像も数躯にすぎないが、いづれも九世紀から十世紀の造像で、量感の充実した彫像である。エミール・ギメが明治九年来日したとき収集したと考えるが、乾漆像にしても木彫像でもいづれも完形像でなく、廃仏毀釈のあふりによって寺院から流れ出た彫像で、修理がされないまま公開されている。これは像の構造がよく判明して、ある意味においては幸いなことである。仏画も数幅展示され、文殊十羅刹女像などは南北朝時代の保存良好な仏画の一つである。他の近世絵画室は、俵屋宗達や尾形光琳を始めとして琳派の作品が、大きな掛物ではないが公開される。恐らくヨーロッパの人々に琳派の装飾的華麗さが好みにあつたであろう。

(三)

ギメ国立東洋美術館は以上見てきたように、インド以东の宗教美術、ヒンドウ教美術も多く含むが、仏教美術の発展過程と、東への仏教美術東漸の姿を豊富な実物資料をもって説明することが出来る珍しい美術館で、世界にあまり他例を見ない。しかも例えばハツダ出土のストウパーのごとき法量の大きなものもあつて、完全に復元がなされている。また数種のストウパー基壇もあわせて公開され、あるストウパー基壇については復元せずに出土状態のまま補強しているものもある。



ハッダ ストゥーパ基壇

ハッダのストウッコ像で想起されるのは、パキスタンのタキシラに所在するジョーリアン遺跡やモフラ・モラド遺跡のストウーパや奉献ストウーパである。

ジョーリアンはレベルが違った二つの塔院が一部重なって所在し、東部に一段高く僧院が塔院に接して所在している。北側の塔院は主ストウーパがなく、数基の奉献ストウーパと祠堂が残っている。南の上

層塔院は中央に円形基壇のみ残した主ストウーパがあり、それをめぐって約二十基の奉献ストウーパがあつて、数層の基壇の四面にはストウッコで塑形した見事な諸像で飾られている。モフラ・モラドウはジョーリアンと同じ峰つづきの山の、西方の小さな谷の奥にストウーパと僧院がある。ストウーパは縦約二〇メートル、横約十八メートル、高さは約五メートル弱で、基壇の側面に仏・菩薩のストウッコ像がはりつけられ、この両者とハッダのストウッコ像は非常に近似している。

ストウッコの塑像はガンダーラの初期からあつたが、石彫像に押されてあまり発展しなかつた。しかしのちガンダーラ石を切り出しえない状態に入ると、石膏と粘土の粉末を混じて塑成するストウッコをもつぱら作るようになる。タキシラからハッダにわたる間のストウッコ像は正気にあふれ、洗練されたものが多い。

ギメ国立東洋美術館所蔵のパーミヤン東大仏龕の大陽神ミイロ¹¹ミヒラ図の模写も、東大仏龕が破壊されたいま、パーミヤンを知る貴重な資料となつた。

以上のもと、収蔵される数々の豊富な美術資料を、現存する遺跡を頭に浮かべながら、東洋美術の推移を同一箇所でも探求できることは誠に希少な美術館である。大英博物館など著名な博物館もヨーロッパにはあるものの、東洋、特にインドを基点としてアジアに展開した宗教美術を、ギメ国立東洋美術館ほど収集保管している施設は他にないといえよう。